

ロールズ『正義論』とそのローティ的解釈

0. はじめに

- ・ 本勉強会の目的
- ・ ロールズとローティ

1. なぜ『正義論』が求められたか

人間は基本的に社会的、集団的な生活を営む性質を持つ生物である。つまり、なんらかの集団を構成し、その集団に帰属している。だが、なんらかの集団においてその集団の指針を決定する際には、「規範」が必要とされる。

『規範とは「・・・である」という存在 (is) の法則ではなく、「・・・すべきである」という当為 (ought to) の法則であり、具体的には社会において支持を得た一定の価値観にしたがって行為を規律するルールのことを言う。つまり、規範とは特定の社会において採用される行為の評価基準であると言える。規範とされるものには、通常法律、道徳、習慣などが含まれる。(後略)』¹

「行為の評価基準である」ということ

＝どのような行為が「善」、「正義」、「合法」であるかはその集団内部において主流的な規範が決定するということ

ロールズの『正義論』は現代社会における新たな「規範」の導出を狙ったものであり、想定される市民各人の「善」を調停する「規範」としての「正義」の必要性を説いたものである。

2. ロールズ『正義論』について

J・ロールズの『正義論』、その目的

＝個々の事例に対する裁定基準としてではなく、社会の根底的基盤の基礎理念の構築
その中心規範としての「正義」の提示、及びその必然性を明らかにすること

つまり、ロールズは {
どのように「正義」を導出し、主張したか？
どのような「正義」を欲し、提示したか？
なぜその「正義」は優先的に求められる価値を有するのか？

その内容の理解が必要である

『正義論』の中心的概念として

- ・ 反照的均衡理論（あるいは内省的均衡理論）
- ・ 無知のヴェールと原初状態
- ・ 正義の二原理

主にこれら三つの語がロールズの『正義論』を理解する上で重要となってくるが・・・

- * 問題はそれらの語をどう組み合わせるかで理解するか
→安直な理解はロールズの誤読を生む

まず、一般的（とも一概には言えないが・・・）なロールズの『正義論』の解釈では

- ①人々にとって普遍に合意可能な「規範」を得るため「無知のヴェール」を適用する
（「無知のヴェール」によって導出された規範はある種の契約説により正当化される）

↓

- ②それにより正義の二原理が導出される

↓

- ③反照的均衡理論によって修正が行われ、より安定的な「規範」となる

という理解をするとロールズを誤読することになる

では、どのようにロールズを理解すればよいか

- ①我々に存在する直観的な道德判断を抽出する

↓

- ②その上でその直観的な道德判断を形式化する

（リベラルな社会ではそれが「無知のヴェール」であり、
リベラルでない各々の社会においてはまた別の形で形式化されることになる）

↓

- ③そうして形式化された道德判断に照らして「正義の原理」が導出される

↓

④最終的に得られた「正義の原理」が最初の直観的な道德判断と合致していれば、その原理は正しいとされるが、合致していなければまた最初から検討することになる
(反照的均衡理論)

つまりロールズが『正義論』で行ったことは、普遍的な道德概念を正当化する試みなのではなく、どのような道德概念を「正義」として人々に合意させられるかという企てなのである

3. ローティのロールズ解釈

このような理解に沿えば、一部に存在するロールズをカント主義者であり、文化的差異に鈍感な普遍主義者であるという言説は誤りであることがはっきりする。

『私が試みたことはロック、ルソー、カントが提唱した伝統的な社会契約の理論を一般化し、高度に抽象化することである。』²

というロールズの発言は、あくまでも「社会契約」という方法論をカントらより昇華させて利用したという点においてのみ、カント主義的であったのである。

当然、従来のな普遍主義、超越論の人間本性を理論化した提示なのではないか、というロールズ解釈も誤りとなる。

ここからアメリカの哲学者であるリチャード・ローティは、ロールズをリベラル・アイロニストの陣営の一員であると延べ、ロールズを『完全に歴史主義的かつ反普遍主義的である』³と定義するのである。

✓ では、このようなロールズを支持するローティの思想とは何か？

- ◇ 反普遍主義
- ◇ 反基礎付け主義
- ◇ プラグマティズム

4. おわりに

【参考文献】

- ・ ジョン・ロールズ [訳：矢島鈞次] 『正義論』 紀伊國屋書店 1979年
- ・ 渡辺幹雄 『ロールズ正義論の行方』 春秋社 1998年
- ・ Ch.クカサス、Ph.ペティット [訳：山田八千子、嶋津格]
『ロールズ「正義論」とその批判者たち』 勁草書房 1996年
- ・ 渡辺幹雄 『ロールズ正義論とその周辺』 春秋社 2007年
- ・ 川本隆史 『ロールズー正義の原理』 講談社 1997年
- ・ リチャード・ローティ [訳：伊藤春樹、他] 『哲学と自然の鏡』 産業図書 1993年
- ・ リチャード・ローティ [訳：斎藤純一、他]
『偶然性・アイロニー・連帯』 岩波書店 2000年
- ・ リチャード・ローティ [訳：須藤訓任、他]
『リベラル・ユートピアという希望』 岩波書店 2002年
- ・ 渡辺幹雄 『リチャード・ローティ ポストモダンの魔術師』 春秋社 1999年
- ・ 仲正昌樹、他 『現代思想入門』 PHP 研究所 2007年
- ・ 魚津郁夫 『プラグマティズムの思想』 ちくま学芸文庫 2006年
- ・ 猪口孝、他 『政治学事典』 弘文堂 2000年

1 『政治学事典』より引用

2 『正義論』より引用

3 『リチャード・ローティ ポストモダンの魔術師』より引用